ヨハネによる福音書 1章 19~28節

今月は、「ヨハネによる福音書」が前回までの「序言」($1:1\sim18$)から「本文」($1:35\sim$)に移る その移行部分に進み、ヨハネの語りかけを聴き取りたいと思います。移行部分は「1 章 $19\sim34$ 節」までで全体ですが、今月はその前段「 $19\sim28$ 節」を読むことにしましょう。

ヨハネによる福音書はここで、すでに序言で触れたバプテスマのヨハネを改めて正式に登場させ、 そのヨハネにイエス・キリストを紹介させることから、本文へと筆を向かわせます。今月はその「上 (前段)」で、「下(後段)」がこれに続きます。バプテスマのヨハネにとって、それは単に「人物紹 介」といった類いのものだったのか。それとも、それ以上の何かが込められたものだったのでしょう か。

*ちなみに、ヨハネの呼称については、新共同訳聖書は小見出しで「洗礼者ヨハネ」と表現していますが、ここでは従来の呼び方に従い、「バプテスマのヨハネ」と呼ぶことにします。

まずは、序言を振り返りつつ、(ヨハネ福音書が描く) バプテスマのヨハネの基本的特質について 見ておきましょう。

「神から遣わされた一人の人がいた。その名はヨハネである」(1:6)

- ・ここに言われる「ヨハネ」とは 12 弟子の一人のヨハネでも初代教会の長老のヨハネでもなく、まさに今月の人物「バプテスマのヨハネ」にほかなりません。
- ・バプテスマのヨハネは、4 つの福音書のいずれにおいても イエス・キリストを指し示す人物として描かれています。ただし、ヨハネによる福音書にはとりわけそうした色合いが濃く見て取れます。 それはどうしてなのでしょうか。
- 一説では、ヨハネによる福音書の執筆・編纂当時の情況が関係していると言われます。すなわち、当時、バプテスマのヨハネの流れを汲む人々の中に、「自分たちのグループの創始者(バプテスマのヨハネ)がイエス・キリストに出し抜かれて、2番目の地位に 貶 められている」との不満があったようだというのです。ですから、そのような誤った競争意識を正し、イエス・キリストの中心性とそのもとでのバプテスマのヨハネの役割を明確にしようとしたのだろうと推測しています。
- ・実際、これは決して小さなことではなく、今月のメッセージの内容にも関わる大切なことのように思われます。

・興味深いのは、「序言」部分($1:1\sim18$)でバプテスマのヨハネについて語られているのは合わせて 4 節だけ($6\sim8$ 、15)でしかないのに、そのわずか 4 節の中で「証し」という言葉が 4 度も繰り返されていることです。

- ・「光」とは 言うまでもなく、イエス・キリストのことです。4節で「人間を照らす光」と言われ、 9節では「まことの光」とも言われています。
- ・バプテスマのヨハネはその光について「証し」をするために来た、とヨハネ福音書は語るわけです。
- ・事実、「証し」への言及は、4福音書の中でヨハネが突出しています。

マタイ、マルコ、ルカの 3 福音書は、バプテスマのヨハネを「説教者」「バプテスマの授与者」「キリストの証人」として、これを紹介しています。

これに対し、ヨハネ福音書が紹介するバプテスマのヨハネは「キリストの証人」としてのみです。

- ・「証し」とはそもそも「証言」ということで、それは決して軽いものではありません。その重い事柄を、ヨハネ福音書はなぜ執拗に繰り返すのでしょうか。ヨハネによる福音書を読み解くかぎの一つはどうやら、このあたりにあるようです。
- ・ルカはルカで、「およそ女から生まれた者のうち、ヨハネより偉大なものはない」(ルカ 7:28) と記しています。
- ・バプテスマのヨハネの偉大さとはいったい、そのどこにあるのでしょうか。

こうして 今回の 1 章 19 節以下が始まりますが、その初めは又しても「証し」の一事からです。 「さて、ヨハネの証しはこうである」(19) と。

「エルサレムのユダヤ人たちが、祭司やレビ人たちをヨハネのもとへ遣わし」た (19)

- ・事は「エルサレムのユダヤ人たちが、祭司やレビ人たちをヨハネのもとへ遣わした」ことから起こりました。「あなたは、どなたですか」(19) と、得体の知れない不審な人物 バプテスマのヨハネを問い質し、その正体を特定するためです。
- ・ここで遣わされたのは、「サンヒドリン」というユダヤの最高法院から派遣された一団とみられます。ローマ帝国の治世下、ユダヤの宗教的最高議会として、国内の様々な事柄を管理した部門です。
- ・実は、ユダヤは当時、エルサレムの救いを待ち望む空気で満ちていました(ルカ 2:38 参照)。 祖国の解放を切望する祈りです。すでに 90 年近くもローマ帝国の属領とされ、祖国を踏みにじられていたからです。人々の間には、旧約聖書に約束された「救い主」の到来を心待ちにする熱い思いが 溢れていました。
- ・実際、メシアを偽証する者が起こり、革命を企てることが頻発したとも言われています。
- ・そんななか、バプテスマのヨハネが現われたのでした。ルカによる福音書は次のように記しています。「民衆はメシアを待ち望んでいて、ヨハネについて、もしかしたら彼がメシアではないかと、皆心の中で考えていた」(ルカ 3:15)
- ・しかし 心穏やかでないのは当局です。ユダヤの指導者たちは、人々の動きに敏感でした。不測の 事態が生じ、ローマの介入を招くことを恐れたからです。

そして、あと一つ。宗教の権威を自称する彼らの保身とプライドが許しません。そこにあるのは、 彼らのどんな思いだったでしょうか。

- ・ですから、当局はバプテスマのヨハネのもとに調査団を派遣したのでした。今回の箇所です。
- ・これが事の背景とその動機ですが、私たちははたして、そこに人間の何を見、また私たち自身の何 を見るでしょうか。

「彼は公言して隠さず・・・言い表した」(20)

- ・ 遣わされた者たちがバプテスマのヨハネに尋ねます。 「あなたは、どなたですか」 (19) と。
- ・それに対し、「彼(ヨハネ)は公言して隠さず・・・言い表した」というのですが、この言い回し からどんな印象を受けるでしょうか。
- ・「告白して」「否まず」「告白した」という、どう見ても奇麗とは言いがたいゴツゴツした表現を当てたヨハネ福音書の意図は、いったい どこにあるのでしょうか。
- ・また、(これに続く一連の応答も含め) バプテスマのヨハネの返答を見るとき、その目がどこに向けられているか、見て取れはしないでしょうか。それははたして、どこに、なのか。そのあたりに、彼・バプテスマのヨハネの特質が隠されているように思われます。

「メシア」(20) 「エリヤ」(21) 「あの預言者」(21)

- ・当局とヨハネとのやり取りに出てくる人物3人です。
- 1.「メシア」とは元来、「油注がれた者」を意味しました。旧約時代、王は油を注がれて即位しました。「油を注ぐ」とは、神の働きのために特別に選び分かつことです。

こうした背景のもと、旧約聖書は、神はしかるべき時に 御自身の特別な使いを世界に送られると 語り続けました。比類のない油注がれた者、すなわち「究極的な救い主」です。

2.「エリヤ」とは、旧約聖書が「見よ、わたしは大いなる恐るべき主の日が来る前に 預言者エリヤをあなたたちに遣わす」(マラキ 3:23) と告げた、その預言者エリヤです。

実際、バプテスマのヨハネの容貌はエリヤのそれとよく似ていました。旧約・新約 両聖書を読み 比べると、エリヤは「毛衣を着て、腰には革帯を締めていた」(列王記下 1:8) とあり、ヨハネも また「らくだの毛衣を着、腰に革の帯を締めていた」(マルコ 1:6) とあります。しかも、語る内 容まで同じ「悔い改め」の説教ときては、ヨハネの内にエリヤの再来を見ても不思議はありません。 3. そして「あの預言者」とは、いつの日か起こされるとされていた「モーセのような預言者」を指 していました。旧約聖書に「わたしは彼らのために、同胞の中からあなたのような〔すなわち、モー セのような〕預言者を立てて その口にわたしの言葉を授ける」(申命記 18:18) と語られている、 その預言者です。

「わたしはメシアではない」(20) 「違う」 「そうではない」(21)

- ・ですが、畳み掛けるように質問する当局の担当者たちに対し、バプテスマのヨハネは彼らを困惑させる応答をします。「自分はそのどれでもない」と。
- ・実は、3つの問いに対する ヨハネの3つの答えも、正確には次のような順序になります。「わたしはメシアではない($\dot{\epsilon}\dot{\gamma}\dot{\omega}$ $\dot{o}\dot{v}$ $\dot{\epsilon}\dot{i}\mu\dot{i}$ \dot{o} $\dot{c}\dot{v}$ $\dot{c}\dot{v}\dot{\omega}$ $\dot{o}\dot{v}$ $\dot{c}\dot{v}\dot{\omega}$ $\dot{$
- ・返答の内容とその単純化は はたして、ヨハネの姿勢の何を表わしているのでしょうか。

エルサレムからの使い:

「それではいったい、だれなのです。

わたしたちを遣わした人々に返事をしなければなりません。

あなたは自分を何だと言うのですか」(22)

バプテスマのヨハネ:

「わたしは 荒れ野で叫ぶ声である。『主の道をまっすぐにせよ』と」(23)

- ・業を煮やした当局者たちの詰問と、それに対するバプテスマのヨハネの返答です。
- ・ヨハネの言葉は旧約聖書 イザヤ書 40 章 3 節からの引用で、それはそもそもは、バビロン捕囚 (紀元前 6 世紀、ユダヤ民族が新バビロニア王国の首都バビロンに捕囚された出来事) からの解放 を告げる預言者の言葉でした。
- ・その言葉を、バプテスマのヨハネはそれから 5 世紀以上経た福音書の時代に引用しています。そ の意図はどこにあるのでしょうか。
- ・イエスの時代における「囚われ」とは、また「荒れ野」とは、そして そこからの「解放」とはいったい、何を意味しているのでしょうか。
- ・さらには、捕囚と無縁に見える今・この時代の日本に生きる私たちにとって、それらはいったい、 どんなメッセージを持っているのでしょうか。

最後に、バプテスマのヨハネの人となりを想わせる言葉を2つ、見たいと思います。

「わたしはその履物のひもを解く資格もない」(27)

- ・一つはこれで、当時、履き物の紐を解くのは奴隷の務めとされていたことと関連しています。
- ・すなわち、暑くて、埃っぽいパレスチナです。訪問者へのもてなしの第一は、足を洗う水を用意することでした。そして、足洗いのその務めは通常、奴隷の役割とされていました。
- ・他方、律法の教師に仕える弟子の務めに関し、次のような申し合わせがあったといいます。「弟子は教師のため、奴隷が主人にする務めの一切を行なうものとする。ただし、履き物の紐を解くことはこのかぎりでない」。つまり、「弟子は先生のため、何でもしなくてはならない。とはいえ、足から履き物を脱がせ、その足を洗うこと。それだけはしなくていい」というのです。あまりに汚くて臭く、

酷だからでした。

- ・そうした奴隷の務めすら、する資格がない。これが、バプテスマのヨハネの告白でした。
- ・ここから、ヨハネのどんな人となりが見て取れるでしょうか。

「あなたがたの中には、あなたがたの知らない方がおられる」(26)

- ・そしてあと一つが、この言葉です。
- ・「あなたがたの知らない方」とはいったい、どういう意味なのでしょうか。
- ・そもそも、イエス・キリストはユダヤの普通の人々の中で育ちました。イエスという人間がいることを、誰も本当に知らなかったのでしょうか。
- ・「あなたがたの中には、あなたがたの知らない方がおられる」とバプテスマのヨハネが言うその真 意とは はたして、何なのでしょうか。
- ・「知る」とは、どういうことなのでしょう。とりわけ、「本当に知る」とはどういうことなのでしょうか。私たちの「知り方」が問われているように思われます。

そして、本当の最後の最後にですが、以下の事実の中に あと一つ、大事なメッセージが置かれているように感じるのですが、いかがでしょうか。

それは、バプテスマのヨハネがイエスに実際に会うのは実は、次回の29節以下においてである、ということです。にもかかわらず、ヨハネは(ここまで見てきたように)その前にすでに、イエスに出会っています。それはいったい、どういうことで、どんな重要な事柄を物語っているのか。そしてそれは、この私たちがイエスと向き合うときの、その向かい方とどのように関係しているのか。そうしたあれこれに想いを向けながら、今月の聖書をいま一度、読み直してみてはいかがでしょうか。